



史傳

野村望東尼

(續き)

下村三四吉

かくて、晋作は、望東のために、下關の豪商入江和作の茶亭を借りて、ここに寓せしめ、懇待慰安至らざるところなかりき。此間の消息は、尼が郷人におくりたる書簡中に詳かなれば、左に引かん。

高杉のはからひにて。此頃は、入江和作とて、大正義の町人の許にかくまはれてなん。誠に、極樂世界に生れしやうなり。……この人ともどの指折の金持にて、高杉もこの家にてく

らされし其跡におのれを預けられしかば、人遠き四疊半の茶莊にものして、茶道具菓子などさへ、のこるかたなし。家内も皆よき人にて、心をそへ侍るまゝ、何のうれひもなく、おもふまゝなり。茶室の内に爐火をものして、寒さもしらずすゝし侍れば、御心やすかれかし。衾なども黒びるうと、羽二重、又は緋羅紗に紫吳呂服の裏などのふとん、源氏物語の古畫かきたる屏風、など引まはし、朱檀の机硯箱にて、短冊色紙から紙などの頼み物多ければ、かきくらし侍るなり。かくばかりきらくしきにつけても、囚屋なかのやつれころもこそはぢらひ侍るぞかし。その情状まのあたり見たらんが如し。

晋作は、志を得て尼の舊恩にむくい、望東は囚獄の苦境を脱して、優遊ころゆくばかりなり。

しかも好事魔多く、憂患つぎて来る。晋作は、その後程なく病氣に胃されて病臥の身となり。久しくして癒えず。望東は、この間絶えず病床に侍して、湯藥を進め、看護怠りなかりしが、その効もなく、慶應三年四月十三日晋作は終に不歸の人となりぬ。年僅に二十九。望東の悲痛おもひやるもなかく、をろかななり。

さても、征長の幕軍敗れしより、天下の形勢はここに一變し、薩長の二藩は相連合し、兵力を以て幕府を倒し、王政復古の事を擧げんとし、諸將次第に兵を率ゐて東上の途に就けり。この時望東は下關より來りて山口に在りしが、夙志の漸く達すべきを喜び、歌を以て、進發の諸將を送りさ。

その一

山田大人(○即ち後の山田顯義)いくさつかさをし

て出でたまふを

みよのため、いくさひきゆくものゆに、
老が心もたぐへてぞやる。

己にして、九月下旬に及び、尼は三田尻に來りて豪商荒井致知の家に寓せしが、このたびのいくさの勝利を祈らんとて、一週日間宮市の天満宮に参籠し、毎日歌一首を詠じて、これを納めぬ。その歌詞雄渾にして、憂國の至情外に溢れ、丈夫もなほ及ばざるの概あり。中につき三首を録す。

わづさ弓ひく數ならぬ身ながらも、

おもひいる矢は、たいに一すぢ。

みちもなく、亂れあひたる、難波江の、

よしあしわかる時やこのとき。

九重に、八重ゐる雲や、はれんとて、冬
たつ空も、春めきぬらん。

十月初旬より、望東はふと風邪に胃されしが、老體といひ、且つは、囚獄に一年の痛苦を忍びし後なれば、病容次第に不良に傾き、その十一月六日に至りて、

ふもひおくこともなければ、今はたい、
すいしき道にいそがせたまへ。

との辭世の歌を詠じ、六十二歳を一期として、永眠に就きぬ。

望東尼の長逝に先だち、十月十四日、徳川十五代の將軍慶喜公は、既に大政返上の事を請ひ、つぎて十二月九日には、いはゆる王政復古の大號令は發せられ、彼れが生前に憂慮せるところは實行せられ、明治の盛世を見るに至れり。望東尼若し地下に知るあらば、歡喜いかにぞや。明治十四年朝廷命じて望東を靖國神社に合祀し、つぎ

て正五位を贈られたり、嗚呼この忠烈の偉婦人死して餘榮ありといふべし。

故中村正直先生嘗て『日本列女傳』に叙して曰へるあり。「余嘗て謂へらく、婦人の平時に良妻たり善母たるもの、不幸にして、禍に遭へば則ち烈婦節母となり。譬へば、薔薇花盛に開き、暖日蕩漾すれば艷光軒に映じ、春風披拂すれば濃香庭に満ち、揉碎壓搾して香水となすに至るに及べば則ち芬烈徘徊、衣裳に薰り簾帷に透り、久しきを經ても歌まざるが如し。蓋し、境に順逆あり、命に吉凶あり、その良妻善母となると、烈婦節母となるとは、二あるにあらざるなり、異なる所以は、遭遇これをして然らしむるのみ。……正直曰はく、人生の遇ふところは、蓋し順逆の二境を出でず。且く婦女を以てこれを言はんに、幸にして無

事の日に遇へば則ち、貞静已を守り、勤儉家を持し、夫の内助となり、子の儀範となり、不幸にして、艱難の際に當れば則ち、心志を剛堅にして、品行を扶植し、善く辛苦に耐へ、久しく艱難を忍ぶ。これ有識者の世の婦女に望むところなり。……良妻とならざれば則ち、烈婦となり、善母とならざれば則ち節母となる。これに一わらば、芳香芬烈の邦國に流播するもの、それ必ず遠からん。(○原)と。讀者望東尼の傳を讀み、しかる後、右の中村先生の言を反覆玩味せば、蓋し大に得るところわらん、余か本傳記述の趣旨も從て自ら明かなるべしと信ず。

(完結)

(附言) 望東尼の事蹟傳ふべきもの甚だ多し。余は、本篇に於いて、たいその大綱を擧げたるのみなるが、なほ本誌數號の紙上に亘

れり。余が精彩に乏しき記述は、讀者の倦厭を招きしこと少からざるべし。是れ余が深く謝するところなり。さて、望東尼の詳傳はこれまでまとまりたるものなかりしが、三宅龍子氏(花園女史)の手に成れる詳密の傳記『も●●●●のしづく』の標題を以て、不日金港堂書籍株式會社より出版せられん筈なりと聞く。豊富なる材料に據り、女史特得の流麗なる筆致を以て記述せる該書は、定めてこの稀世の女丈夫が面目を躍如たらしむるものわらん。序に先容をなして讀者諸君に報ず。

